

# 新 地場企業 群像

広島県内を中心に土木・建築工事を手がける。地元三次市では奥田元宋・小由女美術館や妖怪博物館などを建設。河川や道路の維持管理、災害復旧も担う。人材不足を背景に「進化するケンセツ」を掲げ、情報通信技術（ICT）を活用した最先端の建設技術の研究開発と実践に力を注ぐ。

国事業の一環で、現場の作業短縮やスキルアップなど生産性向上を目指すプロジェクトに、2020年から3年連続で選ばれた。メーカーなどと取り組む一つが、複数の建設機械を



「マルチコックピットシステム」を使い建設機械を遠隔操作する社員（加藤組提供）

## 最先端の建設技術追求

加藤組  
（三次市）

遠隔操作できる「マルチコックピットシステム」だ。映像に加え、拡張現実（AR）技術の活用などによって現場のさまざまな状況を把握。自宅やオフィスにいて油圧ショベルやブルドーザーなどを操作できる。小型機械を使ったデモンストレーションを重ね、まずは同市内のグループ企業が舗装資材の製造工程での実用化を目指している。

土木工事への3Dデータ導入など、ICTを活用

し始めたのは16年。「建設業界はイメージだけでなく、実際にきつい。深刻な人材不足の中でどう労力を軽減するか。そのための道具の開発はいとわれない」と加藤修司社長。以前は採用ゼロも珍しくなかったが、近年は毎年7、8人が入社し、今や社員全体の約3割を20代が占める進化ぶりだ。

20年には広島大（東広島市）のネーミングライツ（命名権）を得て工学部の施設に命名。反響は大きく、昨年から東京都のベンチャー企業と建設用3Dプリンターで道路の雨水升などを造る試行に取り組む。最先端の施工技術を生かし、国土交通省の宇宙開発事業にも関わる。加藤社長は「三次市にいながら月面基地を造る」。夢があると思いませんか。失敗を恐れず挑戦し続けたい」と力を込める。

（石井千枝里）